

風の末裔シリーズ・6th シーズンの 10

～明日つむぐ風～



——とうん——

——とうん——

鼻先も分らない真つ暗。自分が空間を蹴る波紋だけが、チラチラ波打ちながら、遠ざかって消えていく。

——!!——

後ろから、眩しい光が伸びる。おとうさんが、さっきの毛むくじやらをやっつけたんだ。

もう大丈夫、おとうさんはとっても強い。

……っっっ?

いつもと違う、怖いのが消えない?

真横から?! ——もう一匹いた!! —— わわわっ!!

もう一度眩しい光。

大きな強い手に引っ張られた。はあ、安心。

……あれ? おとうさんの手と違うっ?

けど……大丈夫、これは、大好きなヒトの手だ。

この世には、三種類のヒトがいる。

大好きなヒトと、好きなヒトと、知らないヒト。

「シンリイ、無事か?」

長い髪のナーガが、額飾りを揺らしながら、羽根の子供を覗き込んだ。子供は腕の中で、にっこりと笑った。

「ナーガか?」

水色の妖精が、空間を蹴って、渡ってきた。

「すまなかつたな、そっちの奴はノーマークだった」

「たまたまですよ。私が来なくても、貴方なら間に合ったでしょう」

「まあ、間に合わなくても、シンリイは大丈夫だ」

「ほお、攻撃魔法でも身に付けましたか?」

「いや、逃げ足だけは、トンでもなく早くなった」

「……」

「ボクに何か用事か?」

「ああ、はい」

二人の大人が話を始めたので、羽根の子供は、離れてその辺をスキップし始めた。おとうさんの作った結界は、おもしろい。

……と、暗闇にもう一人誰かいる。緊張して不安そうに突っ立っている子供。知らない子だ。

「えと…こんにちは」

その子が挨拶したが、シンリイは後ずさって身構えた。

「カノン」

呼ばれて子供は、大人たちの方へ走って行った。

「ふうん、予知の力が不安定なんだって？ まあ、最初はそんなモンだよ」

「予知力に関しては、私には未知の部分が多くて。やっぱり、

モチはモチ屋かと」

「親子三代面倒みるってか？」

「ああ、そうなりますねっ、ふう」

「簡単に言いな」

カノンは、ナーガ長の隣で黙って待ちながら、内心後悔していた。

長殿に術の手ほどきを受けるようになってから、夜、やたらと夢を見るようになった。

〈予知夢の力が引き出されて来たのかもしれない…〉夢の中でそう意識した途端、緊張して金縛りになる。朝起きると汗びっしょりで、眠る前より疲れている。

顔色も悪くてフラフラになっているのを長殿に問われて、そ

の事を打ち明けた。そしたら、〈蒼の里髓一の予知能力者に相談してみましよう〉と、是非もなく連れて来られたのだ。

「このままじゃ、このヒトに預けられちゃいそつだ。今ですら、毎日が一杯一杯なのに、こんな、更に気難しそうなヒトに教わるなんて、想像しただけで目眩がする。」

それに、このヒトは……

「あっ！」

カノンがオレンジの瞳を見開いて頓狂な声を上げたので、大人二人は話を止めた。

「あの子！」

「どうした、カノン」

「あの羽根の子、消えちゃいました。たった今までそこにいたのに」

「シンリイ？ 結界から出て、元いた地上に戻ったのでは？」

「ボクがここにいる間は、勝手に先に戻ったりは…•••いない？」

「いないって？」

「本当にいない。地上の馬のいる場所にも」

水色の妖精は、珍しくあわてた感じで、眉間に指を当てて、集中し始めた。

「結界の歪みから、地上のどこかに、滑り落ちちゃったんだ。」



「今、露骨にホツとしたろ」

水色の妖精が、意地悪い顔で絡んで来た。

「いえっ、そんなっ」

「蒙古斑も消えきらないガキンチョの分際で、師を選び好みするなんぞ、百万光年早いっ。学べるだけ有り難いと思え、この勘違いガキ！」

ナーガが横で、へあーあ、火を付けちゃった…って顔をしている。半分はこのヒトのせいなのに。

「す、すみません、はい、確かにホツとしました」

カノンの言葉に、水色の妖精は怒っていた眉を下げて、へへえ…って顔をした。

「その…長殿の指導だけでも、ぜんぜん着いて行けなくてヒィヒィ言っているのに、更にレベルの高そうなカータンさんの指導なんて、もう僕には無理！…って思ったんです」

あ、なんか、へ自分に限界を作るな…って怒られる流れだな、と思っ、カノンは肩をすくめた。しかし、目の前の男性から、怒りの表情が消えて行った。

「レベルとかいう言葉を使うな…」

諭されたが、トーンを落とした静かな声だった。

「見たろ、シンリィを捜すのは、ナーガの方が断然早かった。

誰にだって秀でた分野がある。それを見付けて伸ばす努力をするかしないかだ」

「は…い」

「ノスリにだって、ホルズにだって、ボクには敵わない能力がある」

「へ…え…」

水色の妖精の声が穏やかになり、カノンが彼を真っ直ぐに見るようになったので、ナーガは口を結んだ。でもその口の端が、ちよっとだけ、ほくそ笑んでいた。

「僕の場合は、予知の力なのでしょうか？」

「ん？ 自分で、どう思っ？」

「えっと、まだ分からないです。でも、ユウジーン役に立てて良かった。これからも、出来るのなら、ああやって、誰かの助けになりたい。でも…」

「ん？」

「怖いんです。予知夢を見るのが心底怖い。ユウジーンが死んでしまう幻を見た時、本当に苦しくて悲しくて…おかしくなりそうだった。それから怒りが湧いて来て、自分を抑えられなかった」

「うん…」

「それから…誰の力でもどうしようもない、大きな災厄を視てしまったら…って考えちゃうんです」

「……」

「考えないようにはしようと思っても、考えちゃうんです。頭から離れないと、本当に視てしまうような気がして。怖いですが、凄く凄く怖い…」

後ろで、ナーガは、目を見開いた。彼の口から、これは初めて聞いたのだ。

水色の妖精は、すぐには返事をしないで、静かに少年に近付いた。そして、その小さい肩に、手を置いた。

「大昔……ボクも同じ台詞をセリフを、大長に吐き出した…」

カノンは、ピクンと揺れた。

「ああ、ボクの子供の頃の師だ。その時、大長は、へ辛いのなら、その能力は封印してもいいって言ってくれた。そんな力よりも、お前の身の方が大切だと」

「……」

「それからだな、予知の力が格段に上がり始めたのは。ボクがその能力を、この身に受け入れる決意をしたからだ」

「……」

「分かるな？ 答えは、さっき自分で言ったろう？ キミには護りたい者たちがいる」

少年は、顔を上げた。

「怖い時は、独りで抱え込むな。いっそ、ハッチャケろ。そして周囲に甘える。キミには、キミを支えたい、友も親も師も、ちゃんといてくれる」

「はい」

「そして、どうしても耐え切れないモノを視てしまった時は…ナーガがボクを頼れ。その先はボク等が引き受けて、キミの頭からは消し去ってやる。ボク等は、キミの身の方が大切だ」

「は…はいっ」

「忘れるな、キミは独りではない」

それで言葉を終わらせて、水色の妖精は、少年から離れた。ナーガは黙って、少年の後ろで、小さく礼をした。

「では、シンリィを迎えに行くとする。久しぶりの高空飛行だ、ああ、面倒くささ」

「あの、カータンさん、ありがとっございました」

「…この際言っておくが、ボクの名は、カワセミだ」

水色の妖精は、踵を返してすうっと消えた。

途端、ナーガとカノンの周囲の闇も消え、二人が出発した、ハイマツの丘に立っていた。

\*\*\*

「色々指導して貰えて、良かったですね」

ナーガがケロリと言った。

「あの…長殿、僕を本当に、あの方に預けるつもりだったんですか？」

「承知して貰えれば、預けるつもりでしたよ」

「……」

「でも、カワセミ殿は、今は、貴方を預かるつもりはなかったみたいですね」

「今は、って事は…いつかはあり得るんですか？」

「貴方が彼を必要とした時ですよ」

けるけるけるんという長殿に、カノンは口を閉じて上目で睨んだ。本当に、このヒトとの禅問答は、又タウナギみたいだ。

ナーガが馬を引き寄せたので、カノンはこれだけは言っておこうと、口を開いた。

「あぁあのっ、カワセミミが弟子をやるつもりがあるのなら、僕なんかよりも、必要としている子がいます。すっくとすっくとあのヒトに焦がれて、教えを受けたがっている子がっ」

ナーガは目を細めて振り向いた。

「カノン、さっき、一度怒ったカワセミ殿が、途中で治まったでしょう。何故だとおもいますか？」

「えっ」

「ゆっくり思い出してご覧なさい」

「えっ…と…？ 正直に本音を話したから…ですか？ 謝って済ませようとしなさい」

「名前」

「はあ、何となくあのヒトには、そうしなきゃならない気がして。ああ、そう、怒った時の畳み掛け方が…!!」

カノンはある事に気付いて、ビククリ目で長殿を見た。

「リリとそっくりだったでしょう」

ナーガはにっこり微笑んだ。

「リリはね、四つの時のほんのひととき、カワセミ殿と旅をしました。その間に吸収しちゃったんです。彼の仕草、しゃべり方、考え方」

「よ、四つの…」

カノンは、自分が四つの時を思い出そうとした。思い出せない…。

「蒼の里に来て、あの子はいつも考えています。こんな時、

カワセミ殿だったらどうするだろう、どう答えるだろう。あのヒトだったら、こんな事で挫けない。あのヒトに恥ずかしくない自分になりたい。多分、自分でも意識せず、常に彼を踏襲している」

「……」

「離れていても、あの子は立派なカワセミ殿の弟子なのです。先方もそのつもりですよ。この間会った時も、ちゃんとリリを導いてくれたでしょう？」

「あ、ああ…はう」

「リリが次のステップに上がる時が来たら、ちゃんと来てくれますよ。心配には及びません」

「あっはい、すみませんでした、出過ぎた事を。でも、よかったです」

自分の事のように嬉しそうにカノンの横で、長は、誰に言うともなずに、呟いた。

「まったく、隣にいる私の事は、ぜんぜん師と思ってくれなくて、父親として煙たがるばかりなんですよね、あの娘(こ)」「

\*\*\*

—わわわわ—

—わわわ—

青い空、高い梢、あお向けで動けない自分。周りはトゲトゲのイバラ。

羽根が絡まって、見事にハリツケ状態。

・・・うんと・・・なんでこんなこと？」

誰かが近付いて来る。バサバサと藪が揺れる。

「なんだあ?! お前!」

葉っぱの間から、真っ黒な顔の男の子。

目の白い所だけ、雪みたいに真っ白。

「なに、絡まってんの? ああ、動くな動くな。今外してやる。

…いてっ」

男の子は小さいナイフで枝を払いながら、トゲの藪に踏み込んで来てくれた。

知らない子。でも、怖くない。

だって、この子の事は、きつと、大好きになる。

\*\*\*

高空気流を駆ける、カワセミの騎馬と白蓬(よもぎ)。

「まったく、世話の焼ける。こういう飄々とマイペースな所なんか、ホンッと、長の家系そのものなんだから。そっぴや、ナーガの奴も、大長に似てきやがったな」



シンリイの『能力』…

自分の『未来さきを視る力』と、長の家系の『物事の流れを見据える力』、その二つが交わったもの。

何だか凄そうだが、実は、とってもシンプルだ。

——未来(なまき)に繋げる力——

意識もせずにはやっているのが不思議なくらいなのだが、彼の繋(つな)ぐヒトとヒトの縁(え)えにしは、ちょっと未来の、ちょっとした準備になっているのだ。

「今度は何を『繋ぎ』に行ったんだ？ まあ、本人も自覚しないで勝手に飛んでいっちゃうんだからしょうがないが。いちいち迎えに行く(こ)こちの身にもなれってんだ」

隣を駆ける白蓮相手に、空の上で独り(ひとり)こする。

「まだ素直に未来を怖がるカノンの方がマシだ。まったく、直感だけのド天然なんだから。あいつに振り回されているうちは、弟子をとって余裕なんか、あるものか」

\*\*\*

三日月湖畔の、曲がりくねった大きな木の上で、黒い男の子と羽根の子供が、協力して、黄色い実(み)に手を伸ばしていた。

「まったく、羽根がある癖(くせ)に飛べないなんて、見かけ倒(た)だな。

ほね、もうちょっとだ」

男の子に支えられて、子供はパチンと実(み)をもいだ。

「一個でいいのか？ その実(み)が欲(ほ)しくて木(き)に登(のぼ)って、イバラの中に落(お)っこちたんだろ？」

子供は枝(えだ)に腰(こし)かけて、黄色いゴツ(ごつ)ゴツした実(み)を見つめ、嬉(うれ)しそうにほおずりした。

「そのままかじるなよ。口(くち)が曲(ま)がるほど酸(すっぱ)っぱいんだぞ。まあ、俺(おれ)も、これ(こ)れを採(と)りに来た(き)ただけだ」

実(み)を採(と)っては懐(ふところ)に入れる黒(くろ)い男(おとこ)の子(こ)の横(よこ)で、羽根(はね)の子供(こども)は、何も言(い)わずに佇(た)んでいる。ほんわか座(ま)っているだけなのに、男(おとこ)の子(こ)の言(い)葉(は)に、ちゃん(と)耳(みみ)を傾(か)けているのが、分かる。

中途(ちゆうと)半端(はんぱ)な相槌(あいま)を打(う)たれるよりも、そ(そ)ち(ち)の方(かた)が、何(なに)でかす(す)つと、安(やす)心(しん)だ。

「母(はは)母(はは)が、この実(み)が好(す)きだったんだ。採(と)って帰(かえ)って見(み)せると、嬉(うれ)しそうに笑(わら)う。その顔(かほ)が見(み)たくて、毎(まい)年(ねん)、実(み)のなる季(き)節(せつ)が待(まち)ち遠(とほ)しかつた。そのま(ま)ま(ま)じゃ酸(すっぱ)っぱいから…」

「蜂蜜(はちみつ)に漬(ひ)けるんだ、輪(りん)切(ぎ)りにしてな」

いきなり地上(ちやうじやう)の藪(くさぶ)に、水色(みづいろ)の髪(かみ)の男(おとこ)性(せい)が立(た)っていた。

歩いて来(き)る足音(あしおと)すらしなかつた。

男(おとこ)の子(こ)は用(もち)心(しん)して身(み)構(かま)えたが、羽根(はね)の子(こ)供(ども)は、ばあ(ばあ)と笑(わら)顔(かほ)

になった。

「帰るぞ、シンリィ」

男性に言われて、子供は枝の上で立ち上がった。

「あ、おい…」

慌てる男の子の横で、子供は、手の中の実に指をかけて、二つに割った。

清しい香りがあたりに満ちる。

その瑞々しい半分を、真剣な顔で、男の子に差し出した。

「え？ えっと、俺、一杯採ったし。お前、それ一個しかないじゃな」

「受け取ってやってくれ」

地上の男性が、静かな声で言った。

男の子が戸惑いながら実を受け取ると、子供は羽根を広げて枝から跳んで、男性の側に降りた。

「あっ待って」

男の子は、懐の一番大きな実を出して、慌てて半分に割った。

「俺、アデル！ 砂の民のアデル」

投げて寄越された半分の実をシンリィが不器用に受け止め、水色の男性は、ちよっと会釈をした。

「なあ、えっと、シンリィ！ また会える？」

「…ああ…、きつと会えるね」

水色の男性の声は、少し上ずっていた。

目の前でシンリィが、さっき裂いた実の残りの半分を、自分で突き出しているのだ。

今度はいったい、どんな未来へ繋げようってんだ？

To be next

二〇一六・九・三〇



